
VOL

3.29 2008 No.02

BASIC INCOME Issue

Eight pages

CONTENTS

ベーシック・インカム のために

堅田香緒里

ベーシック・インカム研究会・東京

ベーシックインカムへの 11の批判と応答マップ

ベーシックインカムは、汗水たらして働いて賃金を得るといった考えとは遠いところにあるため、働くことの美徳を穢してしまうのではないかと。そしてまた、ベーシックインカムは働く権利を阻害するものなんじゃないの？

⇒もっと体系的にみると……

賃労働を通じた統合は、あらゆる貧困との闘いにとっての要石となるはずである。

所得への権利よりも基本的なのは、社会的効用への権利である。

自分自身の仕事で稼いだお金で生きる権利は放棄されるべきではない。

賃労働は、社会的承認の不可分の要素である。

これは、(a) 貧困と闘うことが必要だ、(b) そのためには賃労働が主要な、あるいは唯一の方法である、という二つに分解可能である。しかし、(a) に同意することは必ずしも (b) に同意することを意味しない。もし賃労働を望む誰もがそれにアクセスできないのであれば、貧困を根絶するという目的は達成できない。経験的にも、それを望む全員に賃労働の場が与えられたことなど一度もない。

社会的効用は必ずしも賃労働に由来するとは限らない。たとえばアンナは、銀行での賃労働よりも、無給のフェミニスト活動に社会的効用を感じている。彼女は(社会的効用のためではなく)その給料袋のためにやむなく銀行で働いているに過ぎないんだ。

ベーシックインカムそれ自体は、なんら働く権利を否定するものではない。

いっけんするともっともらしく聞こえるけれど、近年の社会調査はこれとは逆の結果を示している。むしろ近年では賃労働が人びとの生活に占める重要度は落ち込みつつある。多くの人は、お金より自由時間を優先するようになってきた。

賃労働から解放されれば、それ以外の労働一歩支払われない労働一に従事できるでしょ？ 軍事工場で働くよりもっとずっと生産的な労働一子どもを育てたり畑を耕したり一をしたいんだ。

怠け者で何が悪いの？ のらくらするのって素敵じゃない？ 落ちこぼれだっているじゃない。なんの「貢献」をしていないとも、生きていて、いいんじゃない？

「働かざる者食うべからず」っていうけど、土地や資本を持っていない貧乏人は、働かなくちゃ食っていけないし、むしろ働いているのに貧しいのです(ワーキングプア)。働かなくても食ってけるのは、土地や資本を持っている金持ちだけ。だから金持ちにむかって言ってやりましょう、「働かざる者食うべからず！」

ベーシックインカムは、怠け者やのらくら者、落ちこぼれ等のパラサイト(寄生虫)がのうのと暮らすことを許してしまう、けしからんしくみでは？

ベーシックインカムは、「正社員」と「フリーター」の労働条件の格差をもっともっと広げちゃうんじゃないの？(労働力人口の二重構造を強化する。)

いや、むしろそうした「格差」を縮める可能性のほうが高い。というのも、ベーシックインカムは労働者の交渉能力をより高めるから、労働条件の交渉において労働者により有利になる。気に入る仕事をゆっくり探すこともできるし、生活のためにいやいや正社員をしていた人がフリーターのような働き方をすることもできる。さまざまな働き方の可能性を開くことによって、ベーシックインカムはむしろ労働の二極化にいつの日か終止符を打つてであろう!と試してみようじゃないか。

ベーシックインカムは、アメリカやEUのようなカネ持ちの地域でのみ可能なものなんじゃないの？

これは端的に、間違っている! アルゼンチンやブラジル、南アフリカ、メキシコ、コロンビアなんかでベーシックインカム導入の機運は高まっている。これらの国はけして、カネ持ち国家の特権クラブの仲間ではない。

……溶接工をしている若者は、溶接工としての労働ならいつでも売ることができるのに、年配の女性の愛人になって性の力を売るのはいやだという。ある家政婦は長時間の家事労働なら売ってもいいが、インターナショナルの歌をくちずさも時間だけではどうしても売りたいくないという。なぜか。うまく歌えないからでしょうか。しかし、もしそうだとすると、うまく歌えないということを通じて謝礼を受け取っている事実をどう説明すればいいのか。逆の場合も考えられます。ある時計工場で働く一般工員は、時計を組み立てる能力にたいしては金を払ってほしいが、アマチュア映画の仕事で金をもらうのはいやだという。映画は「ホビー」なのだそうです。ところが、映像を見るかぎり、時計工場で流れ作業の持ち場にいるときの動作と、映画を編集しているときの動作は、ほとんど見分けがつかないほどよく似ているのです。それでもなお、彼は断言する。いや、やっぱり違う。ふたつの動作のあいだには愛情と無欲の点で大きな違いがあるんだ。だからぼくは映画で金をもらいたくないんだ、とね。では、本職の映画人や写真家はどうか。彼らは金を受け取っているのではないですか。さらに、写真家はどのような場合に金を払うのかという問題も出てくる。モデルに金を払うことはあるでしょう。逆にモデルから金をもらうこともありうる。けれども、拷問や死刑の執行を写真におさめるとき、写真は犠牲者にも加害者にも金を払おうとしません。また、病気の子供とか、傷ついたり、飢えに苦しむ子供たちの写真を撮るとき、どうして金を払わないのか。これと似た観点から、ガタリはある精神分析学会でこんな提案をしたことがあります。精神分析を受ける人も、精神分析家と同じように、支払いを受けるべきである、とね。精神分析家が「サービス」を提供しているとは言いきれないだし、実際には分業が成り立ち、非＝並行的なふたつの作業が進行しているのではないか。したがって精神分析家による聴取と選別の仕事も、分析を受ける人による無意識の仕事も、同じように支払いを受けてしかるべきだということです。ガタリの提案がとりあげられた様子はありませんけどね。ゴダールがいわんとしたこともこれと同じです。テレビの視聴者に金を払わせるかわりに視聴者に金を払ってみてはどうか、視聴者だって立派に労働を提供しているわけだし、公共に奉仕していることに変わりはないではないか、というわけです。社会的分業によって想定されているのは、たとえばひとつの工場のなかで、職工部門の労働だけでなく、オフィスの労働や試験所の労働も支払いの対象になるということです。そうでないとしたら、製品の下図を引くデザイナーに、職工が自腹を切つて金を払わなければならない状況も、じゅうぶん考えられるのではないか。こうした問いもその他もろもの問いも、こうした映像もその他もろもの映像も、すべて労働力という概念の粉碎をめざしていると思います。労働力の概念がまず最初におこなうのは、ひとつの産業部門をまったく恣意的に切りとり、労働そのものを、愛情や創造性から、そして生産そのものからも切り離してしまうことですからね。つまり労働力の概念は、労働を創造性の対極である保守管理に変えてしまうのです。そうなると労働は、閉ざされた交換回路のなかで消費される資材を再生産し、それと同時にみずからの力を再生産していくことを義務づけられる。この点からすると、交換が公平か不公平かということはたいして重要ではありません。支払い行為は常に選択的暴力をとまなうものだし、労働力を語るよう強いてくる原理には欺瞞が含まれているからです。だから、あらゆる種類の、雑多で非＝並行的な生産の流れが抽象的な力による媒介とは無関係なまま、直接、金銭の流れと関係づけられるようにするために、労働を偽の労働力から切り離さなければならないのです。

(ジル・ドゥルーズ 2007, 『記号と事件』河出文庫 pp.84-86)

わたしたちは労働組合のあらゆる闘争に参加しなければなりません。しかし、その場合でも、労働のコストが問題なのではないということを知っている必要があります。なぜなら、労働のコストはもはや存在しないからです。存在するのは、生産する社会が自らを再生産する必要だけなのです。ひいては、わたしたちは所得の要求を一般化しなければならないのです。

さらにはまた、わたしたちは、学校が中心的な生産資源であることを知っているからこそ、学校におけるあらゆる闘争に参加しなければならないのです。わたしたちは、女性差別が家父長制社会から開かれた生産社会への革命的転換の内実それ自体を構成することを知っているからこそ、女性たちの闘争に参加しなければならないのです。これらのことが可能で適切な唯一の綱領を提示しているからこそ、わたしたちはこうしたことすべての内部に存在していなければならないのです。

(アントニオ・ネグリ 2007, 『〈帝国〉とその彼方』ちくま学芸文庫 p.48)

ベーシックインカムを!

福祉をめぐる戦いは、再開されつつあります。市民権型給与 (salario di cittadinanza = ベーシックインカム) というテーマは、まだ闘争によってようやく示唆されたばかりですが、すでに福祉計画の再建にとっての必要不可欠の回転軸として提起されています。けれども、わたしたちはたったひとつの中心的な要素が多くの問題を一挙に解決しようとか、社会的労働についての一枚岩的な観念によって搾取の諸側面の多元性に立ち向かうことが可能になるとは信じていません。ひいては、新しい福祉の綱領が定義されるためには、数多くのオルタナティブが創り出され、わたしたちによって構築され理論化される必要があると考えています。

(アントニオ・ネグリ 2007, 『〈帝国〉とその彼方』ちくま学芸文庫 p.222)



さあ、ベーシックインカムの闘争へ……!

私たちは搾取されているし、貧しいし、負債を負わされているかもしれない。けれども、私たちがベーシックインカムを要求するのはそのため(だけ)ではない。

私たちはその自由を奪われ、抑圧され、不遇を強いられているかもしれない。けれども、私たちがベーシックインカムを要求するのはそのため(だけ)ではない。

私たちは測定され、分類され、不当な序列化にさらされているかもしれない。けれども、私たちがベーシックインカムを要求するのはそのため(だけ)ではない。

私たちの貧しく、そしてあまりにも豊かで美しい雑多な生を切り縮めるような力が亢進し、私たちの世界のその隅々まで覆い尽くそうとしているとしても。あるいはだからこそ。

私たちは、闘い、笑い、踊り、歌い、憤り、愛で、涙し、転がり、味わい、いとおしみ、愛する……要するに生きることまつわるもろもろすべてのために、もっとも基本的な要求のひとつとしてベーシックインカムを要求する。

第2回 ベーシック・インカム ティーチ・イン

〔サミット体制とベーシックインカム(仮)〕

サミット体制。

わたしたちの猥雑で美しい生をならし、切り縮める力が隅々まで浸透しつつある社会。

ここでわたしたちはベーシックインカムを要求する。

わたしたちの猥雑で美しい生を愛するために、あるいはサミット体制を転覆するために。

日 時：2008年5月31日(土) 15:00—17:00

場 所：早稲田大学(教室未定) ※ 決定次第、Webで公開します。

連絡先：社会哲学研究会 (<http://syatetuken.blogspot.com/>)

発 言：雨宮処凛(『生きさせろ! 難民化する若者たち』(2007年, 太田出版) 他)

入江公康(『眠られぬ労働者たち』(2008年, 青土社) 他)

栗原康(『G8サミット体制とは何か』(近刊) 他)

田崎英明(『無能な者たちの共同体』(2008年, 未来社) 他)

その他